

## 1950年代半ばにおける田中敦子と金山明

加藤 瑞穂(大阪大学総合学術博物館)

戦後日本の代表的な前衛美術グループであった具体美術協会(以下、具体)に1955年から10年余り参加していた田中敦子(1932～2005年)は、主要メンバーの一人として、具体を語る際には必ず言及されてきた作家である。特に21世紀に入って以後は、規模は大小様々ながら、すでに国内外の公的機関8カ所で田中個人の回顧展が開かれている。また戦後日本美術という歴史的枠組を離れ、ドクメンタ12(2007年)や第16回シドニー・ビエンナーレ(2008年)といった大規模国際現代美術展でも複数の主要作が取上げられてきた。

本発表では、この田中作品の特質を考察するために、1955年の具体参加から1965年の退会まで行動を共にし、その後は夫となった金山明(1924～2006年)との関わり、特に彼らが斬新な作品を発表し始めた1950年代半ばにおける両者の関係に着目する。もちろん金山については、1950-51年に大阪市立美術館付設美術研究所で田中を見出し、抽象絵画へと転向させた人物として、あるいは具体退会後の田中の制作を支え続けた人物として、田中を語る上で不可欠な存在であることはすでに周知である。しかし金山が田中の制作に関して、具体的にどのような役割を果たしたのかについてはこれまで論じられたことがなく、金山自身の作品との比較研究も皆無に等しい。その端緒となるべく本発表は、1950年代半ばの両者の作品に見られる同異点を明らかにし、田中作品の特質を分析する。

具体加入前に手掛けられた金山の《Work-C4》、《Work-E7》(1951-54年頃)等と、田中の《カレンダー》3点(1953-54年頃)を比較すると、船荷証券という特種な素材の採用や、それをコラージュするという手法に明白な共通性が見られ、しかも金山が先行し、田中はそれを参照したことが窺える。さらに具体加入前後の時期では、白い紙や板の支持体の周囲に数本の短い線のみを引いた金山による1952-54年の作品群と、布の縁にわずかに切れ目をいれ、細工を施した田中による1955年の作品群が、「縁」への関心という点で両者の親近性を如実に示す。これらの考察を通して、田中の作品は金山からの影響を抜きには考え難いことが明らかになるが、その一方で、前者は後者に比べて、素材となる物質の特性をより大きく生かし、身体感覚に訴える要素をより強く持つことも判明する。その差異は、具体加入後の「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」(1955年)、そして「舞台を使用する具体美術」(1957年)で一層顕在化した。

これまで具体については一般に、生々しい物質感と激しい身体行為を伴う描画が特徴的とされてきたが、田中と金山の作品に着目すると、メンバーの「物質」および「身体」への志向は必ずしも一様でないことが分かる。彼らの作品の検証は、そうした重要な論点をより精緻に見直すと共に、多面的な具体の実像に迫る試みの一つとなるだろう。